

中国人日本語学習者から見た日本人の「あいまい表現」 II

金本 節子
江 婷

はじめに

本稿に先立ち、「中国人日本語学習者から見た日本人の『あいまい表現』I」では、「あいまい表現」に関するアンケート調査（第1部、第2部）の結果に基づき、第1部について中心的に分析した、

第1部では、あいまい表現の使用意図に注目し、I.中国の大学で日本語を学習している中国人日本語学習者、II.日本在住の中国人留学生、III.日本人学生および一般日本人、のあいまい表現の使用意識を中心に比較分析を行った。

当初は、会話中に頻繁に使用される「あいまい表現」は、日本人に特徴的な表現であり、日本人が最も広範囲に多用していると予測していたが、調査結果は予想に反する点も多く、以下のような諸点が明らかとなった。

- ① 来日経験のない中国人の日本語学習者も多様な意図で「あいまい表現」を使用する。
- ② 日本在住の中国人留学生は、日本人よりも「あいまい表現」を多様な意図で使用する傾向が認められる。
- ③ 日本人は「やんわりと表現したい」、「相手を傷つけない」など、コミュニケーション相手への配慮から「あいまい表現」を使用していると意識する傾向が強い。
- ④ 中国人も日本人と同様に相手に対する配慮から「あいまい表現」を使用する。しかし同時に日本人があまり使用しない意図、例えば「自分自身がコミュニケーションをリードするため」、「自分の意思を積極的に表現するため」など、コミュニケーションを自己に有利に進めようとする意図から意識的に使用する傾向が日本人よりも強く認められる。
- ⑤ 中国人と日本人とで「あいまい表現」の使用意図が異なる場合、日本人が相手に配慮して使用している（と意識している）「あいまい表現」は、話者である日本人自身のために意図的に使用していると判断される可能性がある。逆に日本人は中国人の使用意図が適切に理解できず、コミュニケーション摩擦の原因となる可能性が高い。

本稿では、以上のような、日本人と中国人の「あいまい表現」の使用意図に関する分析結果を踏まえた上で、個別の「あいまい表現」に対する〈あいまい度の判断〉に注目し、誤解が生じやすいと推測される「あいまい表現」に関する質問票を作成し、回答結果を比較することによって、あいまい度の判断と誤解の関係を考察する。

1. 「あいまい度」の判断に関するアンケート調査

1.1 調査概要

中国人と日本人とは「あいまい表現」に対する「あいまい度」の判断に相違があるのか。またその判断の違いは相互のコミュニケーションにおける誤解や摩擦と関係があるのか、さらに、同じ中国人日本語学習者であっても、留学経験の有無によって「あいまい表現」に対するあいまい度の判断は異なるのか、これらの問題を明らかにするためアンケート調査を実施した。

調査対象は、Ⅰ中国での日本語学習者、Ⅱ日本に留学中の中国人留学生及びⅢ日本人である。先行研究を参考にして22の「あいまい表現」を使用した会話文からなる質問票を作成し、回答者に各状況における「あいまい度」を判断してもらった。「あいまい表現」による誤解や摩擦は意味の取り違いだけではなく、「あいまいさ」の幅の理解にも重要な誤解の要因があると予測し、選択肢をパーセンテージで示して選択する調査とした。

先行研究¹で挙げられたコミュニケーション摩擦が生じると推測されるあいまい表現の使用例と筆者らの実経験に基づき22問を作成した。各問においては、あいまい度を0%から100%まで20%間隔で設定し、選択してもらった。これらの具体的な場面に對し、回答者が各表現の「あいまい度」をどのように判断しているのかを明らかにするためである。

質問項目はⅠ、Ⅱ、Ⅲとも共通としたが、Ⅱ(中国人留学生)の質問項目にはその状況を「経験したことがあるのか」を加えた。Ⅰ(中国での日本語学習者)のデータを得るため、中国福建省にある三つの大学(アモイ大学、福建師範大学、福州大学)²の日本語専攻科の3年生と4年生の協力を得た。ⅡとⅢに対するアンケート調査は、郵送用とインターネット用の二種類の質問票を作り、郵送とEメールの送付によって行った。

1.2 調査結果と考察

1.2.1 第二部の調査結果：

22項目の質問に対する各回答は、分析ソフトを使い、中国人(ⅠとⅡ含む)と日本人との間の有意差の有無に基づき分類した。中国人と日本人との有意差のある「あいまい表現」は15項目、有意差のない「あいまい表現」は7項目であった。紙面の制約から、本稿では有意差が認められた15項目の考察を中心にまとめ、回答結果を示す表の掲載も最小限に止めた。

表の番号は質問項目の番号と同じにする。例えば、質問1にある表は「表1」「表1-1」「表1-2」とした。また、各表の「0、20、40、60、80、100」の数字は選択項目の「0%、20%、40%、60%、80%、100%」に該当する。

1.2.1.1 中国人と日本人との有意差が認められた「あいまい表現」

質問 1. (Aは学生で、Bは先生) AさんはB先生に通訳のアルバイトを頼まれました。一日(午前9時～午後4時)のアルバイトが終わって、報酬を支払ってもらった時に、

B 先生は二万円を渡しながら、「とりあえず二万円お渡しします」と言いました。

Q：A さんが二万円以上もらえる可能性はどのくらいありますか。

		表 1						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人 %	54 25.2%	53 24.8%	36 16.8%	29 13.6%	26 12.1%	16 7.5%	214 100.0%
	日本人 %	18 14.5%	25 20.2%	12 9.7%	23 18.5%	21 16.9%	25 20.2%	124 100.0%
平均	%	72 21.3%	78 23.1%	48 14.2%	52 15.4%	47 13.9%	41 12.1%	338 100.0%

$$X^2=20.758 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^3$$

表 1 のように、中国人の回答は 7 割が 40%以下に集中した。日本人の回答は分散しており、20%以下の回答と 80%以上の回答がそれぞれ 3 割を超えた。中国人の多くが後で追加のアルバイト料をもらえる可能性は低いと判断したのに対し、日本人の回答はどちらの可能性もあるという判断を示している。

		表 1 - 1						合計
		0	20	40	60	80	100	
世代差	若者 %	8 12.3%	14 21.5%	10 15.4%	14 21.5%	12 18.5%	7 10.8%	65 100.0%
	年配者 %	10 16.9%	11 18.6%	2 3.4%	9 15.3%	9 15.3%	18 30.5%	59 100.0%
平均	%	18 14.5%	25 20.2%	12 9.7%	23 18.5%	21 16.9%	25 20.2%	124 100.0%

$$X^2=12.009 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^4$$

日本人の間の世代差⁵の有無による違いでは、表 1 - 1 のように、若者の回答は分散しているが、年配者の回答は 60%以上が 6 割を超え、80%以上の回答だけで 45.8%を占めた。日本人の年配者では追加のアルバイト料への期待度がより高いことが分かる。

留学経験のない I では 40%以下の回答が 75.6%となり、留学経験のある II の回答は 40%以下と 60%以上に分散した。II の回答は III の日本人により近い結果となった。

質問 2. A：この服可愛いでしょ！

B：わあ！普通に可愛い！

Q：B さんがその服が可愛いと思っている可能性はどのくらいありますか。

		表 2						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人 %	25 11.6%	73 34.0%	54 25.1%	26 12.1%	31 14.4%	6 2.8%	215 100.0%
	日本人 %	9 7.2%	18 14.4%	23 18.4%	34 27.2%	30 24.0%	11 8.8%	125 100.0%
平均	%	34 10.0%	91 26.8%	77 22.6%	60 17.6%	61 17.9%	17 5.0%	340 100.0%

$$X^2=34.392 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05$$

中国人の回答は7割が40%以下に、日本人の回答の6割が60%以上に集中し、それぞれの判断は逆の傾向を示した。

		表 2 - 1						合計
		0	20	40	60	80	100	
世代差	若者 %		2 3.0%	9 13.6%	19 28.8%	26 39.4%	10 15.2%	66 100.0%
	年配者 %	9 15.3%	16 27.1%	14 23.7%	15 25.4%	4 6.8%	1 1.7%	59 100.0%
平均	%	9 7.2%	18 14.4%	23 18.4%	34 27.2%	30 24.0%	11 8.8%	125 100.0%

$$X^2=44.692 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05$$

世代差による違いでは、8割強（83，4%）の若者が60%以上を選択し、年配者の回答は66.1%が40%以下に集中した。若者と年配者の判断は逆の傾向が認められ、「普通に」の若者こととしての性格を反映した結果となった。

		表 2 - 2						合計
		0	20	40	60	80	100	
留学 経験	中国での 学習者 %	9 7.8%	31 27.0%	30 26.1%	19 16.5%	22 19.1%	4 3.5%	115 100.0%
	留学生 %	16 16.0%	42 42.0%	24 24.0%	7 7.0%	9 9.0%	2 2.0%	100 100.0%
平均	%	25 11.6%	73 34.0%	54 25.1%	26 12.1%	31 14.4%	6 2.8%	215 100.0%

$$X^2=14.976 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05$$

留学経験の有無の違いでは、Iでは40%以下の回答が6割、IIでも8割以上に分布しており、いずれも日本人の若者の回答とは逆の結果となった。IIの回答は日本での留學生活から日本人の若者とのコミュニケーション経験が反映されるものと予測されたが、今回の調査結果には全く反映されなかった。

質問 3. A：結婚していらっしゃいますか。

B：ええ、一応・・・

Q：Bさんが現在の結婚生活になんらかの不愉快なこと、言いにくいことなどがある可能性はどのくらいあると思いますか。

		表 3						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人 %	14 6.5%	31 14.5%	29 13.6%	50 23.4%	71 33.2%	19 8.9%	214 100.0%
	日本人 %	16 12.8%	46 36.8%	18 14.4%	21 16.8%	13 10.4%	11 8.8%	125 100.0%
平均	%	30 8.8%	77 22.7%	47 13.9%	71 20.9%	84 24.8%	30 8.8%	339 100.0%

$X^2=34.392$ DF=5 P<0.05

中国人の65.5%が60%以上を選び、64%の日本人が40%以下を選んだ。両者の判断は逆の傾向を示した。中国人は「一応」の表現から、明らかに何か問題があると判断する傾向が認められた。また、世代差の違いでは、若者も年配者も否定的判断を示したが、年配者では、0%の回答が2割を20%以下が5割を超え、結婚生活に肯定的判断が示された。

質問 5. (授業で)

先生：今の説明は分かりましたか。

生徒：もうひとつ分かりません。

Q：この生徒は先生の説明をどの程度理解していると思いますか。

		表 5						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人 %	5 2.4%	34 16.0%	62 29.2%	48 22.6%	63 29.7%		212 100.0%
	日本人 %	11 8.8%	42 33.6%	29 23.2%	33 26.4%	9 7.2%	1 .8%	125 100.0%
平均	%	16 4.7%	76 22.6%	91 27.0%	81 24.0%	72 21.4%	1 .3%	337 100.0%

$X^2=39.510$ DF=5 P<0.05⁶

表5の示すように、中国人の回答は分散している。日本人の場合は、20%を選んだ回答が最も多く、65.6%の回答が40%以下に集中した。また、中国人では20%～80%、日本人では20%～60%の範囲の理解度が示されたが、同傾向であるため大きな摩擦が生じる可能性は小さいと推測される。

質問 7. A：今週は忙しいですか。

B：ええ、試験とかあって。

Q：Bさんは、今週、試験の他にレポートなどもある可能性はどのくらいありますか。

		表7						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人 %	10 4.7%	40 18.7%	28 13.1%	46 21.5%	57 26.6%	33 15.4%	214 100.0%
	日本人 %	9 7.2%	29 23.2%	29 23.2%	25 20.0%	24 19.2%	9 7.2%	125 100.0%
平均	%	19 5.6%	69 20.4%	57 16.8%	71 20.9%	81 23.9%	42 12.4%	339 100.0%

$$X^2=12.704 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^7$$

表7のように中国人と日本人の回答はともに分散する傾向にある。また、中国人の63.5%が60%以上を選んだのに対し、日本人では40%以下が60%以上を上まわる回答となり、相互に逆の判断を示す結果となった。

若者言葉の用法であることから、低い「あいまい度」の回答が期待されたが、I、IIとも6割強が60%以上を選び、若者言葉としてではなく基本の用法に忠実な判断が示された。

また、IIとIIIの比較では40%以下と60%以上の回答を比べると、日本人は40%以下がやや多く、中国人留学生は60%以上の回答が多かった。IIの回答には日本人の若者とのコミュニケーション経験は反映されない結果となった。

質問 8. Aさんの意見に対して、Bさんは「私なども同感です」と答えました。

Q：BさんがBさん以外に同じ意見を持っている人を知っている可能性はどのくらいありますか。

		表8						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人 %	10 4.7%	49 22.9%	47 22.0%	66 21.5%	35 16.4%	7 3.3%	214 100.0%
	日本人 %	13 10.5%	40 32.3%	31 25.0%	17 13.7%	18 14.5%	5 4.0%	124 100.0%
平均	%	23 6.8%	89 26.3%	78 23.1%	83 24.6%	53 15.7%	12 3.6%	338 100.0%

$$X^2=16.503 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^8$$

表8のように、中国人の回答は60%（30.8%）が最も多いが、20%～80%の範囲で分散している。日本人では、20%（32.3%）が最も多く、約7割の回答が40%以下に集中した。

質問 10. (果物屋さんでお客さんがリンゴを買う時)「リンゴを五つほどください。」と言いました。

Q：リンゴが四つ、または六つでもいいという可能性はどの程度ありますか。

		表 10						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人	65	43	25	35	37	6	211
	%	30.8%	20.4%	11.8%	16.6%	17.5%	2.8%	100.0%
国別	日本人	79	22	4	10	7	3	125
	%	63.2%	17.6%	3.2%	8.0%	5.6%	2.4%	100.0%
平均	%	144	65	29	45	44	9	336
		42.9%	19.3%	8.6%	13.4%	13.1%	2.7%	100.0%

$$X^2=39.256 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^9$$

表 10 のように日本人の回答の 8 割強が 20%に集中したが、中国人は 5 割程度に止まった。また、日本人の 6 割強が 0%を選んだが、中国人の回答は 3 割弱であった。留学経験の有無でも有意差は認められたが、I、II とも 20%の回答が 50%を占め、同傾向を示した。

質問 11. A：この歌は好きですか。

B：好きではないかもしれません。

Q：B さんはこの歌をどのくらい好きだと思いますか。

		表 11						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人	54	79	47	15	14	2	211
	%	25.6%	37.4%	22.3%	7.1%	6.6%	.9%	100.0%
国別	日本人	42	57	17	8		1	125
	%	33.6%	45.6%	13.6%	6.4%		.8%	100.0%
平均	%	96	13.6	64	23	14	3	336
		28.6%	40.5%	19.0%	6.8%	4.2%	.9%	100.0%

$$X^2=14.525 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^{10}$$

日本人の回答は約 8 割が 20%以下に集中し、40%の回答を加えると 92.8%になる。中国人の場合では 20%を選んだ回答は 63%あり、40%の回答を加えると 85.3%に達した。中国人も日本人も回答が 40%以下に集中するが、20%以下の比率は日本人が 2 割程度高く、B さんの歌に対する好感度についてより低い判断を示した。

質問 13. (A さんは新入生で、B さんは 3 年生)

A：一限目の授業は何時から始まりますか。

B：たしか 9 時だったように思うけど・・・

Q：B さんが授業が 9 時から始まるかどうかよく知らない可能性はどのくらいありますか。

		表 13						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人 %	53 24.8%	44 20.6%	20 9.3%	33 15.4%	47 22.0%	17 7.9%	214 100.0%
	日本人 %	24 19.4%	42 33.9%	23 18.5%	21 16.9%	13 10.5%	1 .8%	124 100.0%
平均	%	77 22.8%	86 25.4%	43 12.7%	54 16.0%	60 17.8%	18 5.3%	338 100.0%

$$X^2=25.152 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^{11}$$

表 13 のように、日本人では 20%以下の回答が 5 割を、40%以下の回答が 7 割を超えた。中国人の回答も 20%以下が 4 割を、40%以下の回答が 5 割を超え、同傾向が認められたが、日本人の回答は「ように」に実質的な意味を認めない判断が優勢であるのに対し、中国人の回答は「よく知らない」可能性が高いとする回答も多く、判断に揺れが生じている。

質問 14. (AさんとBさんが専門分野のことについて話している)

A: この説についてどう思いますか。

B: おそらく正しいんじゃないかと思いますが…

Q: Bさんがこの説が正しいと信じている可能性はどのくらいありますか。

		表 14						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人 %	14 6.6%	25 11.7%	37 17.4%	33 15.5%	77 36.2%	27 12.7%	213 100.0%
	日本人 %	0 0%	4 3.2%	14 11.2%	34 27.2%	59 47.2%	14 11.2%	125 100.0%
平均	%	14 4.1%	29 8.6%	51 19.8%	67 19.8%	136 40.2%	41 12.1%	338 100.0%

中国人の回答は、36.2%が 80%を選んだが、その他の項目でもいずれも 15%前後の回答があり、回答は分散傾向を示した。日本人の回答は 60%と 80%に集中し、60%以上の回答が 85.6%に達したが、中国人では 64.4%で、「～んじゃないか」の表現に対し、日本人はより肯定的な判断を示したと言える。

世代差の違いでは、両者とも 8 割以上の回答が 60%以上を選んだ。80%以上を選んだ年配者は圧倒的に多く 7 割を超えたが、若者は 5 割以下に止まった。

		表 14 - 3						合計
		0	2	4	6	8	10	
似た経験	ある	5	3	12	12	31	9	72
	%	6.9%	4.2%	16.7%	16.7%	43.1%	12.5%	100.0%
	ない	2	9	6	1	1	2	21
	%	9.5%	42.9%	28.6%	4.8%	4.8%	9.5%	100.0%
平均	%	7	12	18	13	32	11	93
		7.5%	12.9%	19.4%	14.0%	34.4%	11.8%	100.0%

$$X^2=29.406 \text{ DF}=6 \text{ P}<0.05^{12}$$

表 14 - 2 のように、類似経験のある回答者では 80%以上が 5 割を超え、日本人の判断に近い傾向を示したのに対し、類似経験のない回答者では 5 割以上が 20%以下に集中し、類似経験の有無によって判断に大きな違いが認められた。

質問 15. (A さんが自分で作った料理を B さんに食べてもらった時)

A: どうですか。

B: うーん、けっこうおもしろい味ですね。

Q: B さんがまたこの料理を食べたいと思う可能性はどのくらいありますか。

		表 15						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人	22	49	54	48	31	8	212
	%	10.4%	23.1%	25.5%	22.6%	14.6%	3.8%	100.0%
	日本人	35	53	20	12	4		124
	%	28.2%	42.7%	16.1%	9.7%	3.2%		100.0%
平均	%	57	102	74	60	35	8	336
		17.0%	30.4%	22.0%	17.9%	10.4%	2.4%	100.0%

$$X^2=49.521 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^{13}$$

15 のように、日本人の回答の 7 割が 20%以下に集中した半面、中国人では 20%以下を選んだ回答者は 33.5%で、日本人の半分以下となった。

日本人の間の世代差では、8 割強の若者の回答が 20%以下に集中するが、年配者では 20%以下の回答は 60.4%であり、2 割程度の差が認められた

留学経験の有無では、I の回答は 20%～80%に分散している。II の回答は 40%以下に集中する傾向があり、特に 20%以下を選んだ I と II の比率は 23%と 45.5%であり、留学経験による差が大きいと言える。

質問 16. A: 今度の募金に協力してもらえますか。

B: そうですねえ、ちょっと考えさせていただいていいですか…

Q: 最終的に B さんが A さんに協力する可能性はどのくらいありますか。

		表 16						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人	43	87	50	22	10	2	214
	%	20.1%	40.7%	23.4%	10.3%	4.7%	.9%	100.0%
国別	日本人	40	65	17	3			125
	%	32.0%	52.0%	13.6%	2.4%			100.0%
平均	%	83	152	67	25	10	2	339
		24.5%	44.8%	19.8%	7.4%	2.9%	.6%	100.0%

$$X^2=24.295 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^{14}$$

日本人の回答は8割以上が20%以下に集中しており、40%を選んだ回答者を加えると97.6%が協力する可能性に対して否定的である。中国人では20%以下を選んだ回答者は6割程度、40%の回答を加えると8割を超える。だが、一方で60%以上を選んだ回答は、日本人では2.4%にすぎないが、中国人回答者では15.2%が協力してもらえる可能性を期待しており、適切に判断できていない結果となった。

質問 18. Aさんは研究助成金を申請した結果、「今回は見送ることになりました」という通知をもらいました。

Q：Aさんが研究助成金をもらえる可能性はどのくらいありますか。

		表 18						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人	66	45	35	21	25	19	211
	%	31.3%	21.3%	16.6%	10.0%	11.8%	9.0%	100.0%
国別	日本人	85	24	7	5	1	3	125
	%	68.0%	19.2%	5.6%	4.0%	.8%	2.4%	100.0%
平均	%	151	69	42	26	26	22	336
		44.9%	20.5%	12.5%	7.7%	7.7%	6.5%	100.0%

$$X^2=52.513 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^{15}$$

表 18 のように、日本人の回答は7割が0%に集中し、20%以下でほぼ9割が否定的な回答だった。一方、中国人では0%の回答は日本人の半分以下に留まった。また、60%以上の可能性を選んだ回答も3割を超えた。問 17 と同様、婉曲な断り表現として使用される決まり文句のあいまい度の判断では、両者の間に大きな差異が認められた。

留学経験の有無の比較では、0%の回答はIでは20.4%、IIでも5割以下(43.9%)に止まる。それでもIIはIの2倍以上の回答が的確な判断をしたことが分かる。可能性が全くない状況にもかかわらず、60%以上の可能性を期待する回答は、Iでは3割(33.6%)を超え、IIでも約3割(27.6%)に達した。

また、類似経験の有無による比較では、類似経験のある回答者は6割が0%に集中したが、経験のない回答者では3割(31.4%)に止まった。経験の有無によって大きな差が生じること

が分かる。

質問 20. AさんはBさんの隣に住んでいます。Aさんの娘はピアノの発表会が近づいているので、最近夜遅くまでピアノを弾いています。AさんがBさんに会った時、BさんはAさんに「最近、娘さんは毎晩夜遅くまでピアノの練習を頑張っていて、偉いですねえ。」と言いました。

Q：BさんがAさんに伝えたいことが「娘さんのピアノの練習に対する熱心さに感心している」ということである可能性はどのくらいありますか。

		表 20						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人	64	87	30	14	15	2	212
	%	30.2%	41.0%	14.2%	6.6%	7.1%	.9%	100.0%
国別	日本人	12	32	45	13	14	8	124
	%	9.7%	25.8%	36.3%	10.5%	11.3%	6.5%	100.0%
平均	%	76	119	75	27	29	10	336
		22.6%	35.4%	22.3%	8.0%	8.6%	3.0%	100.0%

$$X^2=47.909 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^{16}$$

表 20 の示すように、中国人の回答は 20%以下に集中し、否定的な判断が 7 割を超えた。日本人の回答は 20%以下は 35.5%にとどまっている。特に、中国人の場合は 0%の回答が 30%を超え、否定的な判断が日本人の 9%を大きく上回った点が注目される。

留学経験の有無の比較では、I の 36.5%が 0%以下を選んだが、II は 22.7%に止まり、より日本人の判断に近い傾向が認められた。しかし、II と III の比較では、留学経験をもつ留学生の場合でも日本人との判断の差が依然として大きいことから、このような言語行動が中国人の場合にも認められること、またその場合に、会話の裏に隠された意図に対して中国人は日本人より、より敏感で厳しい判断を下す傾向を持つと予測される。

質問 21. A：そのドラマはハッピーエンド (happy end) と言ってもいいですか？

B：そう言えなくもないですね。

Q：Bさんがそのドラマをハッピーエンドだと思っている可能性はどの程度ですか？

		表 21						合計
		0	20	40	60	80	100	
国別	中国人	13	41	71	45	29	14	213
	%	6.1%	19.2%	33.3%	21.1%	13.6%	6.6%	100.0%
国別	日本人	4	29	51	31	5	4	124
	%	3.2%	23.4%	41.1%	25.0%	4.0%	3.2%	100.0%
平均	%	17	70	122	76	34	18	337
		5.0%	20.8%	36.2%	22.6%	10.1%	5.3%	100.0%

$$X^2=12.547 \text{ DF}=5 \text{ P}<0.05^{17}$$

回答が最も集中しているのは40%で、中国人は3割を、日本人は4割を超えた。より否定的な判断と考えられる40%以下では、中国人58.6%、日本人67.7%で日本人のほうが否定的な傾向がやや強く認められた。

IとIIの比較では、Iの回答では40%を選んだ回答は28.1%で、さらに数値が下がった。IIは、4割近くの回答者が40%を選び、40%以下を選んだ回答者は66.7%、60%以上の回答は33.4%となり、IIの判断はIIIの日本人の回答に近い傾向が認められた。

1. 2. 中国人と日本人との差のない「あいまい表現」:

中国人と日本人との回答結果に有意差が認められなかった7項目< 4. 微妙 6. ちょっと ~ 9. ちょっと 12. (もし無理な) ようでしたらいいんですけど・・・ 17. 都合が悪い 19. 引越しの事例 22. 自信はありませんが>についてはコミュニケーションにおいて誤解や摩擦を生じる可能性は低いと予測し、本稿では紙数の制限から省略する。

- * 「微妙」のような漢字から判断できる表現に対する理解は日本人とあまり変わらないが、実際に若者が使っている文脈で理解できているかは疑問である。
- * 中国人、特に中国国内の学習者は日本人と接触するチャンスが少ないため、学習過程で指導された通りにステレオタイプの判断をする傾向がある。「断り表現」として教わったことのある「ちょっと」と「都合が悪い」においては、日本人との間に差がない。
- * 中国人においては、相手に頼もうとする前に言う「(もし無理な) ようでしたらいいんですけど」と謙遜表現「自信はありませんが」のような「前置き表現」に対する理解は中国にも同様に存在することから、日本人と同じような感覚で判断していると考えられる。

2. 中国人と日本人の「あいまい表現」に対する判断の特徴

アンケート調査の第二部のデータ分析から、以下のことが明らかになった。

2.1 日本人の「あいまい度」の回答に対する考察

- * 日本人同士でも、回答が一つの選択肢に集中することは非常に少ない。一つの項目に50%以上の回答が集中したのは3項目(7. とか、16. 考えさせていただく、18. 見送る)だけである。日本人の「あいまい表現」に対する「あいまい度」の判断には、一定の傾向は認められるものの、同じ日本人の間でも判断にかなりの幅があることが確認された。従って日本人同士でも誤解や摩擦が生じてしまう可能性がある。また実際のコミュニケーションにおいては、その場の状況や、非言語的な表現が大きな影響を持っていることを考慮入れる必要がある。
- * 「あいまい表現」は、「控える気持ち」を表わしたり、「断定することを避ける」ように工夫したり、表現に「幅」を持たせたり、「目上の人やあまり親しくない人」に「敬意」を

表わすなどは先行研究でも指摘されているように¹⁸ 心理的距離をコントロールするための重要な役割を果たしている。

- * 世代差に有意差が認められた項目は7つあり、「1. とりあえず」、「2. 普通に」、「3. 一応」、「6. 9 ちょっと」、「14. ~のではないか」、「15. おもしろい」、「22. 自信はありませんが」である。特に若者独特の「あいまい表現」¹⁹ については世代差が明確に認められた。
- * 年配者の回答は若者より分散する傾向にある。年配者は、年齢を重ね、経験を積み重ねることによって、多様な場面や状況を想定し、判断を保留したり、より幅の広い判断をする可能性があるとして推測される。
- * 多くの項目では若者は0%と100%を選ぶことを避ける傾向がある。年配者より若者のほうがぼかすための手段として「あいまい表現」を意識的に使う傾向が見られる。²⁰
- * 「普通に」や「とか」は、若者が多用する若者独特の表現であり、日本人同士でも世代間の差が大きく、誤解を生む要因になる。
- * 「考えさせてほしい」「都合が悪い」「見送る」などの決まり文句は、あらかじめ決まった意味を伝える表現であり、あいまい度が低く、判断が一定項目に集中する傾向が認められた。

2.2 中国人の「あいまい度」の回答に対する考察

- * 中国人が誤解しやすい「あいまい表現」は以下の3種類に分類できる。
 - A. 字面の意味と異なる意味を持つ表現：「普通に」、「もうひとつ」、
 - B. 中国人なら特別な理由がなければつけない表現：「一応」、「ように」
 - C. 幅を表す表現：「とか」、「ほど」、「など」
- * 中国人と日本人との間に差のある15項目については、5項目において、中国人留学生の回答は中国での学習者より日本人のほうに近い傾向が認められた。これらは「もうひとつ」、「ように」、「おもしろい」、「見送る」、「~なくもない」である。留学生活における日本人とのコミュニケーション経験は「あいまい度」の判断に影響を与えているといえる。ただし、若者独特の「あいまい表現」の使用については、留学経験による違いが認められなかったことから、その影響は均一ではないと言える。
- * 文末につける「~かもしれない」、「~のではないか」、「~なくもない」のような「あいまい表現」は、中国人の回答は日本人に近い傾向が見られるが、日本人の回答のほうがより集中度が高い。中国人は「断定的な言い方を避ける」、或いは「責任を回避する」傾向が日本人に比べてより低いので、文末に「柔軟化の効果」のある表現を添加することに対し、日本人的な意識を持っていないことが原因だと考えられる
- * 「考えさせてほしい」と「見送る」などの決まり文句に対し、中国人の回答は日本人より分散する傾向がある。これは学習の有無が関係していると推測される。「決まり文句」は意味が特定されており、学習によって適切な判断が可能となる。
- * 「とりあえず」やピアノの場面では、中国人は日本人より状況判断が厳しく、「あまり期待

しない」、あるいは、ほめ言葉の背後にある否定的な意味を日本人以上に読み取る傾向が認められ、興味深い。実際の場面では、笑顔やあいづちなどの日本人の非言語コミュニケーションによって、大いに判断に影響を受ける可能性がある。

3. 結び

中国人と日本人との「あいまい表現」に対する「あいまい度」の判断には、明確な相違が認められた。その判断の違いから相互のコミュニケーションにおいて誤解や摩擦が生じる可能性が指摘できる。また、同じ中国人であっても、「あいまい表現」に対する「あいまい度」の判断には明らかに留学経験や類似経験の影響が認められる。

今回の調査結果では、中国での学習者の回答が、全体的に当初の予想よりも適切に判断できていることが多かった。中国の日本語教育の現場で「あいまい表現」の教育が重視されつつあり、その効果が反映した結果ではないかと推測される。

引き続き、日本人の「あいまい表現」に対する調査研究を進め、その成果を日本語学習の教材開発に生かしていきたい。

注

1. ①彭 飛 『日本人と中国人とのコミュニケーション 「ちょっと」はちょっと… ポンフェイ博士の日本語の不思議』 和泉書院 2006年3月20日
- ②水谷 信子 『心を伝える日本語講座』 研究社出版社 1999年12月20日
- ③直塚 玲子 『欧米人が沈黙するとき』 大修館書店 1980年11月1日
2. この3大学は福建省では3大大学であり、アモイ（厦門）大学と福建師範大学の日本語専攻科は長い歴史があり、中国においても著名な大学である。福州大学の日本語専攻科は近年新しく設置されたが、卒業生は福建省の日系企業で高く評価されている。
3. 中国人と日本人の回答中には無効の回答が1つずつあり、統計から排除する。
4. 日本人の若者の中には無効の回答が1つあり、統計から排除する。
5. 本研究では、日本人回答者に対して、「30代まで」は若者、「40代以上」は年配者として二つの世代に分けた。
6. 中国人の中には無効の回答が3つあり、統計から排除する。
7. 中国人の中には無効の回答が3つあり、統計から排除する。
8. 中国人の中には無効の回答が1つあり、日本人の中にも無効の回答が1つあり、統計から排除する。
9. 中国人の中には無効の回答が4つあり、統計から排除する。
10. 中国人の中には無効の回答が4つあり、統計から排除する。
11. 中国人の中には無効の回答が1つあり、日本人の中にも無効の回答が1つあり、統計から排除する。
12. 中国人留学生には無効の回答が7つあり、統計から排除する。
13. 中国人の中には無効の回答が3つあり、日本人の中には無効の回答が1つあり、統計から排除する。

14. 中国人の中には無効の回答が1つあり、統計から排除する。
15. 中国人の中には無効の回答が4つあり、統計から排除する。
16. 中国人の中には無効の回答が3つあり、日本人の中には無効の回答が1つあり、統計から排除する。
17. 中国人の中には無効の回答が2つあり、日本人の中には無効の回答が1つあり、統計から排除する。
18. 彭 飛 『日本人と中国人とのコミュニケーション 「ちょっと」はちょっと… ポンフェイ博士の日本語の不思議』 和泉書院 2006年3月20日
彭 飛 『日本語の「配慮表現」に関する研究 —中国語との比較研究における諸問題—』 和泉書院 2005年10月
水谷 信子 『心を伝える日本語講座』 研究社出版社 1999年12月
直塚 玲子 『欧米人が沈黙するとき』 大修館書店 1980年11月
陣内 正敬：「ぼかし表現の二面性—近づかない配慮と近づく配慮—」 『国立国語研究所報告 言語行動における「配慮」の諸相』 2006年 123号 国立国語研究所 くろしお出版社
芳賀 綾、佐々木 瑞枝、門倉 正美著 『あいまい語辞典』 東京堂出版 1996年6月
19. 山口 仲美 『若者言葉に耳をすませば』 講談社 2007年7月
『広辞苑』第五版 1998年11月11日 新村出編 岩波書店
20. 陣内 正敬：「ぼかし表現の二面性—近づかない配慮と近づく配慮—」 『国立国語研究所報告 言語行動における「配慮」の諸相』 2006年 123号 国立国語研究所 くろしお出版社